様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１５４０４

研究課題名（和文）近代における日独学術交流が日本の緑地計画に果たした役割の評価

研究課題名（英文）The influence of academic exchanges between Japan and Germany on the development of Japanese landscape planning

研究代表者
新保　奈穂美（Shimpo, Naomi）

兵庫県立大学・緑環境景観マネジメント研究科・講師

研究者番号：４０７７８３５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末にお雇い外国人教師として来日したハインリッヒ・マイルに注目し、新しく得られた資料を整理することで、マイルの国際交流による林学や造園学への影響を議論した。
結果、マイルが詳細に日本の樹木や森林、そして文化を観察し理解しようとしていたということ、そして人との交流を大事にしていたということがわかった。日本と他国との往来が簡単ではなかった時代に林学の基礎を築くにあたり、ドイツと日本を繋ぐ重要な人物になったマイルによる知識の伝達が役立ったと考えられる。他方、ドイツにとっても外国産樹種の理解と活用に果たしたマイルの功績は大きいとわかった。
研究成果に関しては、現在も論文を執筆中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果により、歴史的にドイツの影響を受けた日本の林学と造園学について、その姿勢や考え方をより深く理解することができ、これからの両学問、そして実践の場面に活かすことができる。また、本研究はハインリッヒ・マイルという人物といくらかの日本人らとの深い交流が、林学や造園学の基礎を築いたことを明らかにした。こうした、海外から来た人々との深い交流を通じて受ける影響や得られる利点を見直すことにより、これからますます国際化していく社会に活かすことができる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on Heinrich Mayr, who came to Japan as a hired foreign teacher at the end of the 19th century in Japan. By organizing newly obtained materials and Mayr's handwritten sketches, the influence of his international exchange on forestry and landscape planning was discussed.
The findings show that Mayr was trying to observe and understand Japanese tree species and forests in detail, as well as the culture of the region and its people, and that he valued human interaction. It is assumed that Mayr became an important link between Germany and Japan and his knowledge transfer was helpful in establishing and fostering forestry science at a time when Japan had just opened its borders to the rest of the world.
On the other hand, for Germany, Mayr’s contributions to the understanding and utilization of foreign tree species including Japanese ones for forest management were also significant.

研究分野：緑地計画学

キーワード：歴史　林学　造園学　日独交流　ドイツ　明治時代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

経済成長の時代が終わり，成熟社会を目指す日本では，森林や都市緑地，農地といった「緑」に対して，新たな役割を模索している。森林の役割は薪炭や建築用材として産業利用から，現在では環境保全やレクリエーション，新たなエネルギー源へ移行している。都市公園等の都市緑地については，環境保全効果や災害避難地，心理的効果などの存在効果に加え，子どもの健全な育成，社会参加機会の提供など，利用効果も重視されてきている。農地に関しても，生産重視の農業の空間から，農村部では過疎化に対応したコミュニティ再生のツールとして，都市部では，少子高齢化に伴う市街地再編に向けた土地活用のツールとしての役割に期待が高まっている。

この流れのなか，行政官や学識者といった計画者は，新たな役割を「緑」に付与する政策や制度を模索している。そのため，日本にこれまでなかった有用な発想を求め，海外事例調査を盛んに行っている。特に緑地計画に関しては開国以来ドイツを手本としてきており，現在でも多くの研究がドイツの緑地計画制度や事例，思想を取り上げている（高柳，2000；江藤・佐々木，2010；上田，2016 等）。

しかし，一方で，日本の社会背景を十分に検討せず，海外の取り組みや思想等の形式だけを取り入れないように留意する必要がある。海外事例のアイデアの先進性にのみ注目してそのまま制度や取り組みを輸入し，形骸化させてはいけない。そのために，緑」に関する海外の知見を，日本は歴史的にどう学んできたのか。社会背景の類似点や相違点を議論したうえで，日本ならではの形に昇華させたのかを調べることは有用である。

島田（1961）や福島（2011）は，日本の林政学がドイツの影響をどのように受けたかについて明らかにしている。しかし，これはドイツ留学をした川瀬善太郎や本多静六らにより著された日本の林政学教科書のみを分析したもので，結果として受容され普及した知識のみを対象にしており，受容のプロセスとしての日独学術交流がどのようなものであったかは明らかになっていない。

２．研究の目的

本研究は，新たにドイツで発見されたハインリッヒ・マイル氏の資料を中心に，関連資料も収集しながら分析し，近代における日独学術交流が日本の緑地計画に果たした役割を明らかにすることを目的とした。目的の達成のために，以下の研究課題を設定した。

課題１）ドイツ側学識者の立場から見た日本との学術交流の解明
課題２）日本側学識者の立場から見たドイツとの学術交流の解明
課題３）日独学術交流が日本の緑地計画に果たした役割の評価

３．研究の方法

ハインリッヒ・マイルに関して，新しく得られた資料やマイルによる直筆スケッチを整理することで，マイルの国際交流による林学や造園学への影響を議論し，日本の林学発展における貢献を考察した。用いた資料は，ドイツで発見された家族による伝記とスケッチリスト，マイルが設立した実験林の樹種リストである。それらを分析して長池（1977）など，日本の文献に記載されているマイルに関する既存の知見と比較しながら，どのような国際交流が実際に行われていたかを多角的に理解した。

４．研究成果

１）ドイツにとって，外国産樹種の理解と活用，そして広く森林経営に果たしたマイルの功績は大きいとわかった。現在もマイルが開設した実験林に植えられた樹種リストより，日本のほかアジアや北米の国々の樹木がいまも残っていることが明らかになり，生育の状況をみられる状況になっていた。開国したばかりで西洋諸国にとっては未開の地であった日本の植生が知られるようになったきっかけの一つとして，マイルの貢献があったといえる。特に，林業において外国産樹木をどう扱うか方針を立てる上で，マイルが実地を徹底的に見たことで得られた，外国産樹種とその生育環境に関する知識は役立ったと考えられる。

２）マイルが詳細に日本の樹木や森林，そして地域や人々の文化を観察し理解しようとしていたということ，そして日本の林学の基礎を築いた中村弥六を始めとした，日本人との交流を大事にし，多くの林学関係者に影響を与えていたということが明らかになった。日本が開国後まもなく，他国との往来が簡単ではなかった時代に林学の基礎を築くにあたり，ドイツと日本を繋ぐ重要な人物になったマイルによる知識の伝達が役立ったものと考えられる。

３）マイル自身，および，交流のあった中村弥六を始めとした人物が日本の林学を築き，またその交流がドイツへの留学ルートにも確立することにつながったことがわかった。林学が造園学・緑地計画学につながっていた日本の歴史を踏まえると，日独学術交流が重要な役割を果たしたと確認された。

＜引用文献＞

1) 高柳敦(2000)：ドイツにおける農家民宿経営-バーデン・ヴュルテンベルク州の事例，森林応用研究 9(2)，1-6
2) 江藤寛子・佐々木ノピア(2010)：欧州と日本における木質バイオマス利用促進政策の比較，日本森林学会誌 92(2), 88-92/上田裕文(2016)：ドイツの樹木葬墓地にみる新たな森林利用，ランドスケープ研究 79(5)，537-540
3) 島田錦蔵（1961)：新訂　林政学概要，地球出版，272pp
4) 福島康記（2011)：わが国林学草創期における林政学について，山林(1523)，12-20/ 白井彦衛（1980)：都市の緑地保全思潮に関する研究：千葉大学園芸学部学術報告 28，1-135 / 赤坂信（1998)：戦前の日本における郷土保護思想の導入の試み：ランドスケープ研究 61(5)，401-404 / 長池敏弘（1977)：ハインリッヒ・マイルの日本山林巡回とその影響について：田中壌日記を中心として：林業経済 30(2)，8-22
5) 長池敏弘（1977)：ハインリッヒ・マイルの日本山林巡回とその影響について：田中壌日記を中心として：林業経済 30(2)，8-22

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関